

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究(B)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18330024  
 研究課題名(和文) 構成主義的政治理論による先進諸国の政治変容分析：英  
 日独の総選挙の比較を通じて  
 研究課題名(英文) Analysis of Political Transformation in Advanced Societies by  
 Constructivist Political Theory: Through Comparison among Results  
 of General Elections in Great Britain, Japan, and Germany  
 研究代表者  
 小野 耕二 (ONO KOJI)  
 名古屋大学・大学院法学研究科・教授  
 研究者番号：70126845

## 研究成果の概要：

「構成主義的政治理論」に基づく具体的政治分析を進めるために、本研究ではまず国内研究会を重ね、その上で、2007年度日本政治学会研究大会において「構成主義的政治理論の可能性」分科会を組織した。これらの議論を踏まえ、2008年5月末には、この分野における先進的研究者を世界各国から招待して国際シンポジウムを開催した。これらの議論の成果は、研究代表者と研究分担者による個別論文の執筆に加え、小野が編集責任者となった『日本政治学会年報 2006年度第2号』（2007年3月刊行）と、『比較政治叢書 構成主義的政治理論の研究』（2009年10月刊行予定）という2冊の論文集となって結実した。

この結果、構成主義的政治理論に基づく具体的政治現象分析は一定程度進展した。2005年9月に行われたドイツ連邦議会選挙の結果分析や、小泉政権分析などがその成果と言える。ただし理論の全体構造の点からすると、まだ理論的に探究すべき問題は残っており、それらの残された課題は、上記国際会議の中でも確認されている。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2007年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2008年度	3,300,000	990,000	4,290,000
総計	9,400,000	2,820,000	12,220,000

## 研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：比較政治・構成主義・政治理論・選挙分析・政治変容・日本政治・ドイツ政治・イギリス政治

## 1. 研究開始当初の背景

哲学における「言語論的転換」を発端とし

て、社会学などの領域で「構成主義」が勃興し始めたのは1980年代からである。そして政治学の隣接領域である国際関係論にお

いて「構成主義理論」が注目を浴び始めたのは1990年になってからであった。そして2000年代にはいと、政治学においても「新制度論への批判」の形で「構成主義的政治理論」が形成され始めている。ただしそれはまだ断片的な形でしか提示されておらず、それらに基づいた経験的分析の作業は未展開のままであった。本研究は、その状況を克服していくための、我が国の政治学における最初の試みである。

## 2. 研究の目的

まだ未展開なままに止まっている「構成主義的政治理論」の全体的構図を見通すために、まず「先進諸国の総選挙分析」という明確な分析対象を設定して、構成主義的政治理論による分析可能性を検証する。そしてその分析を通じて本理論の有効性を確認し、かつその更なる理論的彫琢のために検討すべき理論問題を明確にすることが、本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

1) 国内研究会や学会報告を積み重ねながら、構成主義的政治理論の全体像を模索するとともに、経験的分析に対するその有効性を検討した。具体的には、まず国内研究会を重ね、構成主義的政治理論の全体像の明確化を図るとともに、実証的分析に対するその適用可能性をも検討した。なお、法哲学や法社会学など他の領域の研究者の業績をも検討することによって、視野の拡大をも図った。その上で、2007年度日本政治学会研究大会において「構成主義的政治理論の可能性」分科会を組織した。そこでは、研究代表者の小野がオーガナイザーとなり、分科会の司会を務めた。そして研究分担者のうち、鈴木と近藤が報告を担当し、同じく研究分担者の田村が討論者となった。それ以外に、名古屋大学法学研究科の若手研究者を報告者に抜擢するとともに、政治理論研究者の杉田敦法政大学教授を討論者に迎えて、構成主義的政治理論の現状に関する実り多い討論を行った。

2) それらの研究の成果は、適宜雑誌論文や論文集の形で刊行し、日本の学界内部での討論の材料を提供した。第1年次のまとまった研究成果としては、研究代表者の小野が編集責任者となって刊行された『年報政治学 2006年度第2号』（木鐸社、2007年3月刊行）を挙げることができる。この年報の特集名は「政治学の新潮流」であり、構成主義的政治理論はまさにこの名にふさわしい新しい研究動向として、この政治学会年報において紹介され検討されている。

3) これらの研究を踏まえ、第3年次にはこの

領域における世界の最先端の研究者を招待して「国際研究会議」を開催し、これまでの研究の成果をまとめるとともに、残された理論的課題を明確化する作業を行った。具体的には、2008年5月末に、この分野における先進的研究者を世界各国から名古屋へ招待して国際シンポジウムを開催した。研究者の具体名としては、既存の3制度論を批判しつつ、独自の言説的制度論を提唱しつつあるV・シュミット教授を米・ボストン大学から、同じく構成主義理論を検討しているM・ブライス教授を米・ジョンズホプキンス大学から招待した。その他オーストラリアとデンマークからも研究者を招待して、世界の政治学界における最先端の研究動向を報告してもらうとともに、日本側の研究者も全員が英文ペーパーを用意して討論を行った。それに加えて、構成主義的政治理論に関心のある若手研究者を日本全国から招待して「各セッションの討論者」を担当してもらい、討論の活性化に努めた。その結果、海外からのゲストも高く評価する世界的水準の研究会議を開催できたことと自負している。ただし、構成主義的政治理論の全体像は未だに不明確で、参加者がそれぞれの分野で更に検討を進めるべきことも確認された。なおこれらの議論の成果は、研究代表者と研究分担者による個別論文の執筆に加え、『比較政治叢書 構成主義的政治理論の研究』（ミネルヴァ書房、2009年10月刊行予定）という新たな論文集の形となって結実する予定である。

## 4. 研究成果

1) 小泉政権分析やドイツ連邦議会選挙分析などの具体的政治現象分析においては、構成主義的政治理論の有効性を確認することができた。その成果は、研究代表者である小野のいくつかの論文によって公表されている。

2) 「政治学の3層構造」に対応した「構成主義的政治分析の3層構造」の解明、という点で、本理論の発展の方向性を明らかにした。この点については、研究分担者である近藤の論文などで公表されている。

3) 言説的制度論や、批判的实在論といった、今日の政治学理論における最先端の研究動向と、構成主義的政治理論との関連性を見いだすことはできたが、その理論的解明については未解決のままに止まった。その具体例をいくつか挙げておこう。まず第1に、構成主義的政治理論の存在論 Ontology が、实在論なのか名目論なのかという点についての整理がまだ最終的に出来ていない、という点である。一方で「言語によって認識が構成される」という名目論的傾向性を有しつつも、他方で主体の認識の外部に存在する实在を否定することは出来ない。従ってこの両者をい

かに「一つの政治理論」として統合するかが問われているのである。第2の問題は、構造と主体との相互作用性の検討である。この点については、既にA・ギデンズの「構造化論」という先駆的業績があるが、最近ではそれに加えてM・アーチャーなどの「分析的リアリズム」アプローチや、B・ジェソップによる「戦略論的アプローチ」などの最新の業績も登場している。これらの成果を摂取しつつ、いかにして包括的な政治理論を構築するかが問われているのである。これらの論点は、今後の研究課題として残されている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10件)

- ① 小野耕二「紛争の構図と政治学的分析視角」、名古屋大学『法政論集』、第223号、57-92頁、2008年、査読無し。
- ② 小野耕二「ルーマンにおける『権力』論の形成」、名古屋大学『法政論集』、第221号、55-93頁、2008年、査読無し。
- ③ 小野耕二「シリーズ 比較の中の現代ドイツ政治③ 連邦議会の解散とメルケル政権の成立」、名古屋大学『法政論集』、第217号、369-397頁、2007年、査読無し。
- ④ 小野耕二「『政治学の実践化』への試み」、『年報政治学』、2006年度第2号、178-201頁、2007年、査読有り。
- ⑤ 小野耕二「法律学と政治学との交錯領域へ向けて」、名古屋大学『法政論集』、第216号、1-28頁、2007年、査読無し。
- ⑥ 小野耕二「ルーマンにおける『信頼』論の位置」、名古屋大学『法政論集』、第214号、1-49頁、2006年、査読無し。
- ⑦ 田村哲樹「規範理論と経験的研究との対話可能性」、『年報政治学』、2006年度第2号、11-35頁、2007年、査読有り。
- ⑧ 鈴木一人「グローバル化時代における政治的正統性」、『年報政治学』、2006年度第2号、150-177頁、2007年、査読有り。
- ⑨ 森 正「『制度改革』の政治学」、『年報政治学』、2006年度第2号、60-82頁、2007年、査読有り。
- ⑩ 近藤康史「比較政治学における『アイデアの政治』」、『年報政治学』、2006年度第2号、36-59頁、2007年、査読有り。

[学会発表] (計 8件)

- ① 小野耕二「構成主義的政治理論について」、中部政治学会2008年度研究会、2008年7月13日、名古屋大学法学部。
- ② Kazuto SUZUKI, “Policy Logics of

Japanese Space Policy:

Theory-Interests, Belief and Discourse in Policy-Making”, International Conference on Constructivist Political Theory, 2008年6月1日、名古屋大学法学部。

- ③ Tadashi MORI, “A Constructivist Analysis of Electoral System Reform in Japan, 1988-1994”, International Conference on Constructivist Political Theory, 2008年6月1日、名古屋大学法学部。
- ④ Koji ONO, “On Constructivist Political Theory-Theory and Praxis-”, International Conference on Constructivist Political Theory, 2008年5月31日、名古屋大学法学部。
- ⑤ Tetsuki TAMURA, “What is Constructed through Deliberative Democracy?: Empirical Turn, Institutional Design, and Contestation of Discourses”, International Conference on Constructivist Political Theory, 2008年5月31日、名古屋大学法学部。
- ⑥ Yasushi KONDO, “A Three-Level Model of Constructivist Political Theory”, International Conference on Constructivist Political Theory, 2008年5月31日、名古屋大学法学部。
- ⑦ 鈴木一人「ヨーロッパ統合への構成主義的アプローチ」、日本政治学会2007年度研究大会、2007年10月6日、明治学院大学法学部。
- ⑧ 近藤康史「アイデア的制度論の現状」、日本政治学会2007年度研究大会、2007年10月6日、明治学院大学法学部。

[図書] (計 3件)

- ① 近藤康史、勁草書房、『個人の連帯—「第三の道」以後の社会民主主義—』、2008年、205頁。
- ② 田村哲樹、勁草書房、『熟議の理由—民主主義の政治理論—』、2008年、200頁。
- ③ 小野耕二、青木書店、『日本政治の転換点第3版』、2006年、240頁。

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野 耕二 (ONO KOJI)

名古屋大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：70126845

(2) 研究分担者

田村 哲樹 (TAMURA TETSUKI)  
名古屋大学・大学院法学研究科・准教授  
研究者番号：30313985

鈴木 一人 (SUZUKI KAZUTO)  
北海道大学・大学院公共政策学連携研究  
部・准教授  
研究者番号：60334025

森 正 (MORI TADASHI)  
愛知学院大学・総合政策学部・准教授  
研究者番号：90308776

近藤 康史 (KONDO YASUSHI)  
筑波大学・人文社会科学研究科・准教授  
研究者番号：00323238